雪草
下

花をちりふる月にうゑをみるあはれ
なるふしにして月ぞいとゝくまさる
たまくらのもとなる秋のあはれ
ぬぬ秋かぜの情ふかくはらへ
月ぞ所なるまさる
りまさりまさりて
ふきぬけてともはらるものあはれくまさる
なるともなる秋の花をみくとゝるふりわけて
まるこゝろいもの月のくもとゝ
うらひそはるこゝろれとゝりのこゝ

浜松市図書館蔵書
静文庫

なりにしかたをもはぢてかくれ今は見ぬ雪
しるとはいふのうの雪はしたもとをしぼりて
はるしけき男女はしたもとをしぼりて
とをいふあるこころあるこころをもうさぬ
ひとなり奥ふかくこころをもうさぬ
しとぬれぬ雲井とはいひあさりの家の
ひとりとはいふべしそなたこそいとあの月
はるかに千里はるかまくるあるそらよ
ゆくもはるかはるかにうかぶ雲
んふるうわぬみのそらぶかぬ雲山の

枝のこゑをきりみえうるはのはれ新うちし
うれしうしうぬ雲うれしのうしくなれ
相撲
はうしうこうたふるうみくん
わんなもうれと新こひしうおうのまぬ
ゆくく月花をとさはうしてかうふ相くて
ふるる家をとさうしてもうしてうしてうち
あうしうもこうふるしそいとあのしうなうしあ
まうたくへいをくへうしてをふはうしみもかえ
とを異するうあるはうしうなるをとうさ井か

かた人こそ色こくよろつをもて興すれ
花のもとにハねちより立よりあからめもせ
すまもりて酒のミ連哥してはてハおほ
きなる枝心なくおりとりぬ泉にハ手足
さしひたして雪にハおりたちて跡つけ
なとよろつの物よそなからみることなし
さやうの人の祭見しさまいとめつらかなり
き事いとをそしそのほとハ桟敷不用なり
とておくなる屋にてさけのミ物くひ
囲碁双六なとしてあそひて桟敷にハ人をお

きたれハわたりさふらふといふ時ハをの〳〵き
もつふるゝやうにあらそひはしりのほり
てをちぬへきまて簾はりいてゝお
しあひつゝ一事も見もらさしとまほりて
とありかゝりと物ことにいひてわたりすきぬれ
ハ又わたらんまてといひておりぬたゝ
物をのミ見んとするなるへし都の
人のゆゝしけなるハ睡ていとも見すわかく
すゑ〳〵なるハ宮つかへにたちゐ人のうし
ろにさふらふハさまあしくもおよひかゝらす

まゐらんとする人あまりなるにとゞめかね葵(あふひ)
をかざして念仏申しけるに明(あけ)はなれぬれば
と思ふくらすの車ともの轟(とゞろ)くけしきの
かまびすしき音となりひゞきすさまじき牛飼(うしかい)下部(しもべ)など
はしりまはるものゝ音とうしくかしかましく
くるもさはがしくに様うたにみなるも清まりくまつ
ともらかなるにはあらくなる人清の車ともは
あくなるみゆつく人もいつきへの縁清ぬんかと
なくまれよあひりて車(くるま)ともものらうかうし
さもさるこゝめまにて篭(こもれ)てみるとりあるに

めでたきかしあなかりけるくこそ世乃中
綺しも思ひきてまつ哀(あはれ)なれと大略(たいりやく)
かうこそ縁(えん)ゆゑにみくいわまの機嫌(きげん)なる
をさなら往(ゆき)ゝふ人かうしまうの行まゝにあるに
てありぬ世の人数しさればこそいおなくのぬなり
しそれは人みるうちなん後なる死ぬる人まよさこ
侍りあわともかくならくまちつきぬへしおか
まなるかは川そりのかり水浅くなうそれ穴(あな)を
あゆるかんにてさてなりすまくすしとふ
ともおこゝろまぶくとわりゆうそやうそ候

ぬへし都の中におほき人しなさる日も
あるましきを一日に一人二人のみならんや鳥部(とりべ)
野の舟岡(ふなをか)さらぬ野山にもをくるかすおほかる日
あれとをくらぬ日はなしされは棺をひさく
ものつくりてうちをくほとなしわか
きにもよらすつよきにもよらす思ひかけ
ぬは死期(ご)なりけふまてのかれきにけるはあり
かたき不思議(ふしぎ)也しはしも世をのとかには思ひ
なんやままこたてといふ物を双六(すごろく)の石にてつく
りてたてならへたるほとは取られん事

いつれの石ともしらねともかそへあててひと
つをとりぬれはそのほかはのかれぬと見れと
又々かそふれはかれこれまぬきゆくほとにいつれ
ものかれさるに似たり兵(つはもの)の
いくさにいつるは死にちかきことをしりて家(いへ)をもわすれ
身をもわするる世をそむける草の庵(いほ)にはしつ
かに水石(すいせき)をもてあそひて是をよそにきき
くと思へるはいとはかなししつかなる山の
おく無常(むじやう)のかたききほひきたらさらんや
その死にのそめる事いくさの陣にすすむ

ぬるふたる

ゆふまぬまて後の葵ふるうなをあるへしみ

とるるとうれしうせらをはゝ多をなく

なりえはゝとうたへのゝゆふとうれは

はるへきやと思ひしゝと国治国治

かゝをもとひるれあるとうもうみ

をれ葵のれをなりとりをもを母屋の

みをふあるひはるをまをれるあよ

ゝ家の集ふをりあるをうれををうさ

ふまをうう葵ふさゝてつをゝけるをもは

月枕草子みをこうゝこひゝ我ものをる

ふ葵とうをふうゝいみゝをゝ川ゝう

思ひうをもれ鴨長明四季物語ふをもを

まふ後はあるひはをりをうをふをれ

まとふ形くふふうあう我名ゝあくつく

うをもをゝ色紙はゝりゝのまふをもれ

月九日菊ふうゝらうをとゝはうゝ色を葉よ

ををゝをくもあるゝさゝりをそ枇杷皇后宮

くれはくゝはちゝあるを我はゝはのうちふさうゝ

をををゝのれをあるうはをうを我見くをう

なつぬ梅花の花をぬすんと奔れば花とも
ゝへるを半ばよりあやめ草をあるとうとも
江の海はうみ〳〵そうし
家ふるさとの花本を枯さうゝ春を忘れも
うゝ花ハ色〳〵なるゝ八重桜をなるゝ
郭ふのこゝをけうとしこゝろを世ふ行ゆく
ふなる吉野の花九辺のさゝうれ色〳〵ふ
てゝそあき八重桜をゝやうの物なりいと
こゝろ〳〵行ゆ色色ゝもゝるゝんと
そさゝゝゝとさ海〳〵しゝ行さゝゝゝも

ひゝ〳〵桜をさゝうとゝ桜をゝとゝ〳〵ゝ影う
ゝ咲ゝゝゝもゝさゝゝゝる紅梅の匂ひゝく
ゝ色ゝれ行〳〵とゝ花桜を桜ふゝ花行
ひゝく行ゝ花ゝゝとゝ行ゝくゝゝふし
かゝゝゝさゝゝゝんゝ〳〵ゝゝとゝ〳〵なゝゝ花ゝてち
ゝとゝゝ行ゝゝゝゝ行ゝゝゝ京桜入道中納
言ハゝ花ゝゝとゝ〳〵桜をゝゝん折ちゝゝゝ〳〵ゝらゝゝゝ
ゝゝ京桜の屋ゝ南じゝゝふゝゝゝゝゝ二年行ゝ先ゝり
柳ゝゝ〳〵ゝゝ月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ桜行ゝ花ゝ菊ふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

物なり色ち花ちいけるふまいはあり
さなりうしまい山吹萩ちいけるそて
こ池ふい蓮(はす)杜乃草い萩(はぎ)落(おち)さ地ちうちさと
みをへ　ちちちいふ海ふわまりうう
やちんううさく黄菊もいけるさと知ふ
いまもいとさちかうちとさちやうあちいたり
さるうぬうしいけりれせうましあちあう
ぬけいたうあれやふふ花と見ふまあと
いとあ川うしんたりうさあにとちうしく
あるとうたあいううぬ人れりて興(きょう)する物る

ひさやうれあるうてあるとあん
為死して賊ぬうとい智(ちしゃ)者のせさう処せよ
ううぬ物うるとうへとさあうもいけるさあよ
さあいんけとあちんとはうあ　ちちうふお
かうはまして　我ちそえあるとあよ
りのとちもうく治ふはうるひあはさ海はは
し後ちさうれみとんはを物あうをいまう
んうちふそのあるへさ知ちあてうれいさん
りのうはう絶ちあるとうはうとうさうはう
まうしお

悲田院尭蓮上人と俗姓を三浦氏なるふ
しやさうの氏者なり故に人の来りて
物語をとゝくあつまの人こそいとうとは
あれまうき都氏人いとう色氏みうくて実
なりとつゝしと座をうきさをそをかゝる
ゝをとゝのまい部ふひさしくとゝそをれて
見侍るよ人氏んとをしつとをいひ侍る侍る
へくん屋りゝふ情あるお人のふかゝの
車けやけくいるひをゝてゝ侍をえいひ
をふるあしんをくゝとゝをきをつゝりりせん

といふゝひとをりしくゝれをぬんみあれを
をのはゝかいとをゝぬ車おるゝしゝ行
つまんいをかゝをのきとをふいんを氏をゝなき
けとをきをとんふをくゝをゝるれを侍
先をりいふとをひくゝ屋ゝをぬをきをひ侍をゝか
きをとんりいあれまを侍ゝゝをとをゝ
きを侍ゝゝゝけををりゝあをゆをゝくく
しくゝ座敷のこまあゝ侍をゝをりいをと
きまんとりやと思ひしふ氏一をとを氏激ん
あゝなりて学る中ゝるをを侍抜をゝ

[illegible]
もあるふうにそとたりえ侍
ん[illegible]と見ゆるものもまた一云さいてのもの
あるたうとひとのたてまつりあるかへ
のかへりあひくはるはたもやとそふひとり
もちもち侍るとそ[illegible]うもさくいはの
ひとりたいさりはそ情をされんみそものし
めんといとたそうまつりあゆへよそう侍
侍のあれは思ひしらるとしひうとし
さもあるとめへ[illegible]事なり思ふに道のくく

はうりのけふ思ひあるとあんや書けん
あれ若とるもちくくそ初の志をたくしい
さほうれ世ふそくくさ[illegible]のようはりそ
ふとそとあるうあへくくあるもとけ
あるはすへつくひ望とかさけ見くく毎下り
思ひくとはいとくくとなりさへのんふなりてお
くへて海とうふしくらんとやけあ書るけあ
めふは砲をもとすすもぬとみうつ百尺と
ありそれて遣へといまつのちくこと式のそつ
せんりさせのへけうへとさしくぬやうりせ

といおこるかいまうりこさなわり人げの○の産なる何
さはの武人なり人さとまわてあとこ法世たさ
まうとして凍餒武人なりこと行ことの者
あゆ人こ法人武人なり法とおこうしめく
そ生武法こふちんうそ不役武ときやこくい
こして人武ちし人さとあうこと武とこう
法いやとこ不武あ民とあく農とこちこと下
ふかわん車こうこいあう人こに衣食よ
のはのなうこ人り仏ちせん人とう法の
道人とこりこ

人の路家武わうとこ武いうこ法しこ車をと
人武こ市武世のよあ市ふてこれ
ちといこうこりくうこ人こ武を法こあ人
ハやしくとあう相をこうりをひし
とこちとあうまひもあのじこふあ
あうこそこ人の日こ法武かんきあ行と
尾とあか行まこ武ちあいハ權化の人をこし人
こう法傳学の士しこあう人こ法とあまこふ
而なくこ人武男こくこりいあう人こす
梅尾の上人道武尾こ行こふ法ふく馬行こ梅を

のこれるとしひろれたる人立とまりてあ
れたうとや宿執無義式人ふかくしくとこな
ひろそやいろふ人はれ御馬うわまりふたうと
くあれ行ふいとこれ祈れ府生義武は
馬ふいと答りこはめくもれとうれあ字
年不生ふそあうしうまして法師とし
つふうれとくく恵源とのこうれけうとそ
法師れ奉室行小面の下殿入道伝形を落馬
の相あふ人なり結くはしこれへとひを
ふ成いて面とくくれ思ひふうり伝形ふ

ちれたうて死ふくきうと道ふ長一ぬ一云神
れくくと人ふ人つとさくいろふ桐そせ人
のとひけきとさいく拙ふうて師
芝の馬とこのくしうと式桐成れうせ行き
刈ふうやまりうとう行ぬ家
明ぬ定ふ相者ふあひ治くとのまくし兵
仗の旗やあうと尋ふ桐人まとふ
ふ口たくまとやいろふ桐そと尋
れも傷害のたくれたくまとまう
法ふくくりふもくれりまりてうる

是ちくふちあやうきことは
ものわちくく矢ぶりたりてうせる
ふかりり
癸治あまりこゝろふりめまを神事ふ者
あるとりふとちくくのいのおせるなり格式
ふかもみをすちう
罕い後の人ふ癸をくくこ里を屬の
これを上氣の中あるとおこうをへ庫
華と鼻りあてくかくへくくちいをに出
あるとく鼻より入くく脳をもしをつる

結をけんとするくくをこうん祖をあるを
いふくふこうまくうちくくちくくるくくえく
こうおこうんこういをくくふくくうくくんとつる
ふりまとかくいふくくこ一藏をもうくひうとる
いまを宮国をかなるりるを上をれ中にまく
つをくくをくくをちくくをくくを脳をけまるく
ををくくをくくをくくを天性をれ骨をけまとを
をふふりまをくくりふせをくくて年代をく
をまを懐結のくくふ面をまりをけ井りり
上をの位ふりくり濃くくを人くりゆくくくく双

なさるゝうるはしき天下はあのようなと
ゝも始を不法の中のえをあるを無下乃脇
壇もあるとさとされとも人みちのをそて
あるしく是を行ひくして教授を
されと世ものくせみくの人の師とする
法をうるえうる次
或人のいとく年あるふるまくようふ
いとくさん慶とものをけをけ
るゝゆへさ行ましるを人のうをと
人をえるうる前ふまりうるをあ心

ゝくみるゝあるゝよう後世の志ハさい屋
ゝく脇あるゝもゝゝゝまりしきれ
世信ものゝふゝ川さいゝくゝ生涯をゝゝれ
ハ下愚の人も行ゝくゝ行ゝんゝとい海
ゝいゝくゝゝゝゝ証とゝるゝはおゝ川
ゝゝゝすゝてゝしゝてゝもゝれそむこ
ゝゝくゝゝゝて屋ゝゝんハ貴一の事也
あゝ寺新発上人脇ゝまり眉ゝ後ゝく後ゝ
ゝゝけゝゝゝゝゝ海ゝく同裏ゝまゝゝ
ゝりゝゝゝ元園ゝ同ゝ法屋あるたゝゝ

きしこそやとく伝仰せきこゆるとけき
て資勢の三郎をみくに年ゆきもふひと
やうにしかり後日ふしくたの浦まくく
毛ばりひて毛をけうに成ひせくに
氣色あうとくみえてひとくに国衙へまい
らせらるこそとて
為義大内に入道先ゝ武士と
もとうかうみて云波殿へのくに参まて
資勢の三郎わうふくに是成みくるに浦山
しせふわん思おくこそ行ようあ

まとそいきれきる
山人東さの門ふ為義せりせまこそあ
るりこいりとも此あ門まりのろう
ものも空もねうゆうこうつくろ
くも不をふこやうあるとみくとく
ふくひるたくせりの也空ふり
こまりと思ひくまとりおろかなる
てこそ思法さくふんみくふせあ
えきれこくをふりくしぬ
おいしくたと思ひて行くく後この方う

へ、あれこのそこらやうふし折わることりと
ばかく見とりつこうつくさはるこはわ
をもしすなりきりと思なくおはえきれ
と紙ちうへらきこ宮仕まともこれ場と
てらきとりなりはもをぬへきもも
世ふ一ぬえんへいたる桟橋をこうへ一つい
てけ一さるいへの年ふもとこひんふを
ぬるひくきるのふ一ぬやうれたりふて
とんはへさなり仏病とうあるうこと死ぬ
事一のこ桟橋とこうこすはいくわしそ

やしとる一生徒共滅れうりはるこ
れたるをもけさかのこれこるとあろ
ふうとしこもこうこもこうこもそて
ちふおこふひ於くものやはきこ信よ
つきぬこうこもんとんこ桟橋
といつべうこ決とくのこいるくはとあこ
こしまこさなりこ云これてのこ数り
なり文こそ秋のこるふをあこを春ハや
くこ文のこ成りこ月一夜ちをてり
秋をかひ秋をもくくこわ十月ハふ云

の天氣なのをあとなり物もはなりこの
夢のなりつも先たちくなりしふはなりと
下ち或さしはなりふとしてあるふ
なりむしろ氣下ふまふきそろゆり
まちとはいくさ甚なわし生死病死の
うりさうう事ふ生をりまるりは考はる
とさまはいくあるとを死死をついて代
まこれ死をおもしもさらはしく
うろふ世間まり人皆死ふるふ代をりて
まりとしうも急なるさふたりえを

て来ふたされをりふしをうるれとも磯
くもしうのうううしふ
大阪の大震古はなふ或中ふ代をうくおこる
ふ都ふの中宇治辺を東三条辺
ふくおこるうる四裏ふくをりる代中
はまをふりうりて他へ移年はを
はりさせうことのふ物をけまとも世院はに
ふるとうり中友実なりとて
筆代をとを為うれ楽をとを吉代を
てんと思ふ盃をとれを酒をはりひさう代

とまい掘うこむとて伐ぬかれぬれば
こうろうとみを不吾のあるふまれるとて
らすりうさ海よ生数の一句と見まて行
とうく多後世文をうの幸余りしく
多年の此成行うしるうをたりり
ふい海ひ文をいろをさまりうしひうを
きうんやこを見しるる所世なりんさう
ふとうすとを佛ふふくをりを
り地をとうをあううふを若葉を
世つる海をうを数乱世んるうを縄床

ふいをせて行ぬえをして孫宝るうへ
事理のしるり二るる仏相りそしるさ
まを肉化必熟をきいく不伝とるへう
をあるこくこうし伐ぬるとむ一
盃のうこ伐をうるいんるるとけう
人世るをせ好ふ数高とを行ふ
うこふうるをうまやいらんとを
けをしけふを行次魚道なり海伐
のうくいのつさる所をくるをとを
世界をまて

[illegible]ふしをしとしてふるに蛭と
[illegible]貝の形をしたるやうなるものを人とるに人
作らせこれをみるに[illegible]ふるやうなるものなり
門ふ頭くるまうとふるやうなるものあり動
地の形に二ツ[illegible]門を彫るとなをまひき
見[illegible]持ぬうもうぬるやうなるもの
[illegible]なるとを作りすやうしきうまつるを
又[illegible]護摩をくるとふもうしを[illegible]
[illegible]法乃字[illegible]をして[illegible]
[illegible]濁をくるふと[illegible]冥[illegible]法[illegible]

[illegible]ふるうもとしあり
花の作りをなをすうを百五十日とも時正の
後七日とも又と立春より七十五日あり[illegible]
[illegible]
遍照寺[illegible]兼仕法師池の[illegible]日ろろしつ
きく嵐[illegible]うまくこれまたくこれ[illegible]
きこれい数も三ろとわこころりけり後[illegible]
もるるくくてあてとくつて[illegible]
そそひとろくくしくやしくなる[illegible]
[illegible]ハさてくなる法[illegible]

とゝをおこりて入くゝみるり大獄をふ先
さ行人の中より法師まつくらうふせ
ねちこうしけまとゝ法師ととゝ人て石
ち使廳へ出ゝうりうこうを示す鳥と
ゝひふ行させく拷ふ獄をゝきふ宮の基
後大納言別当の時ふるん行宮の
大鄭乃方式字慈ゝうとゝとゝの儀
陽ゝとゝゝ相論ゝゝ
入道中納言吉平自筆ゝ占文ゝ
ゝゝしゝ法記を和風白反ふあ見点う

ちゝふを書ゝうとゝ
世の人あひ乃ふ時ゝうゝゝ悲しすゝと
ゝ無言案あるこゝ
ゝ無言の法せ世間の法法人の見れ自紀
ゝ毎ふ失ゝゝ得ゝゝ是とゝう
時毎ゝひのふ無道のなりとゝふとを
ゝゝ法
あるまゝ人の部乃人ふまゝうゝこの人ゝ
名書ふゆゝゝゝ者とゝの寺を山紀
ゝしまゝ乃影響ゝ傷ゝて永信ゝうゝを

して人ふまずして見えるし
人間のいとなみあるもとそれみるこの云の日に
雪佛を作りてくらしもあふ金銀珠玉のき
りをいとなみ堂塔をあらんとすること
例ありこれらの人我慢をうちて安堂し
てんや人の命あるとみるかとも下よ
りときゆることをのこるうちふしとなこ
まりと悪だにし
一道ふみ入さるる人行ぬるとしふみ
をとして義をうるなるまりしてくらして

みな仏ゆるしの物とといひふもを思へるとは
孫とたなとうふるうるなりゆるなり
きぬみちのうふしくおかえをある
うやまりをとうるふさるとんとしひて
行をもんふ智恵をりあて今ふ行をふ
はれあるものゆのとうこけ我あるも
のきことをいうるなりとして人
いふふるうをとはるをはるをはるを
他ふ面行ふふはるふいふ大なる失なり仏の
きみくをもを慢はをうるきをうるふくも先

祖父がまれみくも人ふ海さまりとも人ろ人を
あるいとしとふ出くくそていく稲とも内えんり
をこくのとろあるとつしーみくもれ代わを
ろ人ーとこふもいろ人をいひをきま
とさついをもまつくいくこ氏悔んり
一通ふもまとふ出しーめる人いこ河ろ行
をろふを他をーろ他ゆりをを稲さー
ゆふみ湯イめをしてはみりあうか
ろうのー
年老をば人を一事とろしろ姫のをく

これ人のをろふい潟みろとらんをといをろを
老のをうとふくいをふもいあ他ろるん
さくあをとを道ををこを三河おれるさ
ハ一生ばすみくれるをとはをくこ
四今いをすをよくりとひてをうんを方
いをりうろとををろふひちをは内
をろとを代ふいはうめぬるをと我こえを代
ろうあやまりをあるとあ人ーをうみをと
ををう人をすをといひろい形まをりみ
ちをわるーをとを行ゆえぬーまして

えへぬるえありなはかみとあもしくりしき
ぬくもかはらぬ人のいひまうす御代をも
ありし世と思ひなつかしきあやうくいとあやし
行すの式とかやすみし後嵯峨の御代まで
いまより後の代の残りにも同じき事と人
のいひし建礼門院の右京大夫後鳥
羽院の御位ののち又うちすみしたるを
いふより世の式もかはらすとかきたるに
もとりたるを
かゝる事なくて人のふるまひかはりぬると

や周あそくにつきてもこまことくなれと
く侍るへし又しくのうるいとむつかし人
ともいひつれもことはたゝなるもてなし
をも軽からぬさまにそありつくへく時代う
次を定めつのくらゐ道なしいとやんことなきあり
いえんもよそ様し給さなたとわらんあれ
中くきよし心をもいひてんたゝ人ならぬは
まかりて思ふ人のつまひてかくさまを見て
かけん軽ふなといらんいひのほりかはりたる
一院前の主き眼さしある人さことやこち

こゝろたに人の来つくのところに病悩して
侍りぬるいとをしみ久しくおほえさせ
給はねところはひとこせうつてうまし
見えとたかふ人の顔まへなりとはをそへてよそと
見えうらしてくの袖のをひさへ下までめ
とくろまにあるをとも人におかつれぬよく
たかに人はよそりてもわなくとことはみえを
しててちうたつりたかにやうされとおかく
たかになり碁盤のをこゝりうれへそくを
しるふむうひあつるたまりてこゝくは

あらうはわうかりしをとうくみうくちつゝるひ
しうとの後ろくりらしけをたくそはら
いし必ずゆる藩氏宰相にむさく来へ
うし涙口はつりしをそむしくせん
清献公ことは藩に好事を行して善経
をとふことうまもとんつもせ状たりて人ち
若かくやりちんちをつしま涙に縫く
ほしにまふしてみうすれと土国うう
涙そてしく時りし然くうりとしりとむ
風にあうり愚に帝して病を神異ようてふ

るをつうるふ人なりと書よいろうと
一日のまへ人氏然をやの西代りこう
道をあるしくせをこち化と代くうまとと
とちうさ西也面のゆさくこ面と酒せ
もつくさ代人して酒とをくのいをうけり
戒
うさ河を四氣うちりあまわんあふ
うこをくく情欲おりあるやしめく
をけやをうの珠とうらうしふり
似り義弱とこのうて家をはい面
色ををくく若れたりをふ屋つをいさ先ろ
んをりりみて始とあるそひんふ恥ろ
屋をこれむ而ろくふをまを浪多よりを
里情ふめく彩をいをたくして百年
氏為をあるまり命とうふ面先
祈をくくして為のまをくひをうう
んるとハ思ろすをうふんををくる
ろ代世ろをとをるあまりをいわろ
を河のくをさせをめるを情非をとろ屋
あをくをろそをして悪しうくあふ

しんとのつゝみ川
さゝなきさゝ方を毎すけて悲なく人のゝ
らひおろんとゝなたりよきく匂ひ月こゝ時
ふ海さしるゝわくしてゝらひ老ゝ
り海さしろうとし
小野小町ゝのこゝ
ろへゝさ海さむ道とゝ
文清彩ゝ書とゝ流あまと言ふ大師
ひ法絶の因縁よいまゝ大師を兼和ひを
しゝふゝしひ人と小町をこゝなゝと

ゝ後のゝとゝや形れゝゝる
小鷲ふの尼だゝふつゝあまゝ小鷲よ
ゝくなゝとゝふゝ法紀ふゝとゝつゝとは
ゝ法ゝゝしゝ人津れゝゝる中ゝ
乃氏ゝのしゝむゝ義味ゝさゝゝ色
実のゝのせゝていゝ氏やくゝしゝ
ゝゝさんんゝゝまのゝとゝゝまゝんん
ふとゝゝいゝるまんゝ法ゝ人とゝを
ゝゝこゝだひんゝゝとゝんや
世ふいんゝぬゝれたゝ尼やゝあゝゝふ

上つ酒とそめくさ井戸まをうち長屋と
するものいろなりたちへとも人へ
かりとうへうる者ゆ眉をひそめ人うたちり
てそそんとしゝみきんとちふとちつく
ゆきとくゆくくそくろりのませはまを
うふそうしゝ或人へもしらまちふ相人とり
てとこうまゝくゆ悪災なる人を用ゆまへ
ちるゆ病者なりてゆ後をそこうこう道
ゆをいそうへふ日ゆとをはまりぬへ
ゝわくふ日まくゆ彩ゝ物くはとり

ゆひゝゝ生成色そうてうやうみゝてはう
ゆとおほえをたりやあるそうゆたちゆ
をうたくうちうひとそうへとゝてうちうと
見そうと悪悪をうゆ礼式ゆをそしを
ゆとくうゝさめふわひゆをん人ねては
たゝと思いそうんやん人風ふうふうを
をなりとこゆそうよう人とゆくてうへき
さゆをんいりやゝくふゝさふたをえぬ
へゝ人の上ゆくうそうゆふんうゝ思いへ
うそゆりゝんゆくゝと見ゝ人をふ

所(ところ)なくわらひのゝしりことはおほくゑほうし
ゆかみひもはつしはきたかくかゝけて
よういなき氣色(けしき)日ころの人ともおほえす
女はひたひかみはれらかにかきやりまはゆからす
かほうちさゝけてうちわらひ盃(さかつき)もてる
手(て)にとりつきよからぬ人はさかなとりて口(くち)
にさしあてみつからもくひたるさまあし
聲のかきり出して各(おの〳〵)うたひまひ年老(としおい)
たる法師(ほうし)めしいたされてくろくきたなき
身をかたぬきて目(め)もあてられすすちり
るを興(きやう)しみる人さへうとましくに
くしあるは又我身いみしきことゝもか
たはらいたくいひきかせあるは酔(ゑい)なきし
下さまの人はのゝしりあひいさかひてあさま
しくおそろし恥(はち)かましく心うき
ことのみありてはてはゆるさぬものともおしと
りて縁(ゑん)よりおち馬車(むまくるま)より
おちてあやまちしつものにものらぬきはゝ
大路(おほち)をよろほひゆきてついひち門の下
なとにむきてえもいはぬことゝもしちらし

一年をけさうの法師の小童ども
ぞをりあるくやうにぬすびとのいたるやう
なれどもゆゆしかるべきにて
もしせもの後の世をば菩提をねがふべき
ことをせんしせうりいわやまちがりぬ城と
うなひ病をまようく百姓の悪をいと
と家の病を酒ものそとこうまとうと
といとをひとうさとをひ
ぬてるくうの後の世をば人の智恵をとうまひ
吾根をとるくとをのとくして恵をまり

ろはの戒を破るべく地獄ふ堕ちへ酒を
ろくくふのませうるとうまさ
ものふせるとうろ仏の説ものるし
かうとまりとおりあるものとのつく
をくくうとれたるとをあるへ一月の秋宮
ぬあるをぬぬまりくをんぬとふ
徳しくく盃かくうくうの異代ふ
ふとさせつまくうる日四ひのかふ友乃
入ちくくとりあこうまいうをくをんるる
まくくしくうぬあるれみをれうよ

まれくこ御みさるとよう化座りかゝけるこひ
してさうしおさへしかるいとようしゑせハ
こ殊のく火みのく御いてりゐとしてゐさ
てわさとちつきしいひくたりくのとゝろ
いとそうしゑちひのうりや野の山なとりて
行さるゝかへ何ゝふなとひてしくるのよふからの
ころも行くしゝゝかいてこしんへのたいりかま
て今もとりうへ御かくあししなとみるこまかせ
うかもうまてしと行ゐりしこさへのしと戸
みくひしくとなきおかし入うましさハ

入と上戸ハたらしく律をゆるさ給ひりの
や酔くてひきてくわさいしへうふ殊あり
しれをさわけくるふきとかくわまてい
なるかなるかそれけりくつとさりし御
をこさあへをいてこさりもひこしうひくふ
くるゝひとりをとこれかしうるも毛おひゐ
かそくれのかとたくしく律まくし
黒戸ハ小松の門位りつせ給ひく前つくへ上
たらしまし何まさる中せさ給ひし
と系御ちくた子よいとうまゝ世給もうてなやし

かまきにすゝけゝれハ黒戸とかや
いふ
鎌倉中書王にて御鞠ありけるに雨ふり
て後いまた庭のかはかさりけれはいかゝせ
んとさたありけるに佐々木隠岐入道乃
こきりのくつを車につみておほく奉り
たりけれハ一庭にしかれて泥土のわつら
ひなかりけりとりためけん用意有かた
しと人感しあへりけりこの事をある
ものゝかたりいてたりしに吉田中納言の
かはきすなこの用意やハなかりけるとの
給ひたりしかハはつかしかりきいミしと
思ひけるのこきりのくついやしくことやう
の事也庭の儀を奉行する人かはきすな
こまうくるハ故実なりとそ
或所のさふらひとも内侍所の御神楽を見て
人にかたるとて宝剱をハその人そもち給
へるなといふをきゝてうちなる女房の中に
別殿の行幸にハ昼の御座の御剱にてこそあ
れとしのひやかにいひたりし心にくかりき

うの人のうき典侍のり
ゐとうの門通盛上人一切經を將來して六
波羅のあるわやをれとりて一所に安置して
とよ首楞嚴經を海して那蘭陀寺に彩
とこそ歎の中さまゝ〳〵の那蘭陀寺大門小
しさせと江南の流をうけて四海の人あれと
域伽藍法勝寺をもみえとも不動見
ず江南をいかゝ思ふくらんさしそんん
たりし〳〵唐土の西明寺をふしき勿論
ありとやこそ月はさたちやうを正月よりう

きちやうとき云院ち神泉苑へ生く
燒あくるせ法成就の池ふそとをやとい
神泉苑のいきをしいつ
ゆきこゝ宮あんちのこゝをといつのうの
さみるひあるふ仏〳〵ゆまを彩色といつゆま
きこゝ宮とゝ西天竺成ありやまりて白んを
ゆとをゝなりくうあまれまをみとうふ
ゝとゝ行ものをりやさしゝまいい
ゝうのうやゆ馬羽院たさあくたをを海
ゝ宮ゝ海ふく伯らきとゝ行ゆ 鑽波典伯

日記に書きたり
四条大納言隆親卿の
はふとせらるるとそ
さ物さいふ所のあり
なるくち納言鯉と云魚
あんよりあまさけ
条のうあ女鮎の三
ハとやされ
人牛とを角とさ
とるとくさ三

そして人をもよりをぬ
なると人ふ犬といふ
見られとりけると律の
相模守時頼の母を松
守といまやはるる事
ふはうし代
力して
きとの法名義京
ろう結
やうのふ

其男尼か細工によもまさり侍らしとて猶
一間つゝはられけるを義景みなをはりかへ
候はんははるかにたやすく候へしまたらに
候も見くるしくやとかさねて申さ
れけれは尼も後はさは〱とはりかへん
と思へとも今日はかりはわさとかくてある
へきなり物は破るゝ所はかりを修理して
用ゐる事そと若き人に見ならはせて心
つけんためなりと申されけるいとありかた
かりけり世をおさむる道倹約を本とす
女性なれとも聖人の心にかよへり天下
をたもつほとの人を子にてもたれける
誠にたゝ人にはあらさりけるとそ
城陸奥守泰盛はさうなき馬乗なりけり
馬をひき出させけるに足をそろへてしき
みをゆらりとこゆるを見ては是はいさ
める馬なりとて鞍をおきかへさせけり又
足をのへてしきみにけあてぬれは
是はにふくしてあやまちあるへしとて
のらさりけり道をしらさらん人かはかり

おそれあんや
吉田と申し馬家の中御しきたるところの
あり人のちかく行ちふへきよしを云へし家
にかく我はまいりよく見ゆくるゆを取りけれは
西我ま人し沙よく川かくのゝにあやう
きこやゆゑとみえくにあら事あれは
たる我もこゝろへう隙此用心と云これ我
馬家といふ中や是趣意のうやと申さ
よ称律の道の人多とひ不懸なりとも人ともと
懸縁の比家此人ふあり如何思はゆる事ハ

多ゆこなくつし〳〵てそ縁くし〳〵せぬ
ことゝ人ふ自由あるとのもとしてぬも縁
縁不心のみなり行るもれかくる根本ん
作ひもを捨ゐふしてつしめるを得乃
ちやあくゝふしてありしきまゝあれは
失の事なり
或若ふ我法師ふあつて学問して因果の
理をもさり説経なとして世をわたりさ
とをせよといひまてまとし人のまゝふ説経
師ふなりん多然りし先馬ふ家なりしひ

くり輦車をとぬ身は導師ふ法をとら
ん河馬をとしへふをとをとんふり
ひとふくたらをんうをんとひを
ひ沢ふ仏すは後酒みとをとしるとは
んふ法師の無下ふ舟をたを檀那すさ
まくひとへとくをうとをとは
をひりをうはとをうくをひ
ふへけまいをくをたををを
しををりを流布をぬをのま
をて年をふををは法師のをみを

わをすは世界のををくひをとはををを
ををふをくをふををくを大をみを
をを厨しを舟ををつを学問をををんを紙
ををくををくををををふををを
世界ををふをくををををををを
わをりをを目のををは月
目ををくををををををををを
ををををををふをは上をををを
ひしを屋をふをををををを元
ををを河をををををを坂をを橋

ぬとゝふれとゝ（拾くゝれと一生ぬうちむ
孫とゝ行ゝまりゝゝゝんゝとゝ中よりゝまゝ
酒ゝゝふゝとゝくゝ思ゝゝゝゝゝて第一乃ゝゝ銭数
ゝゝ宮ゝゝ毛ゝゝゝゝゝ

ものゝ
とゝ
ゝ
と思ふ
梅忘
うと思
うゝ人の
ゝてい一の
ゝけるゆ

さまてゝ
屋ゝ
蓮法師
きりゝ
ゝひふ
といひ
ゝと人の
らゝ
まりの
ゝさ

つゝしひ行りふるりとや給ふらそ拾し
くるゝゝうゝあり拾を敏ときハ則功ありとそ
論語といふふみを給ふかほとゝ幾とゝ
くゝしひ給ふやうふ一大事因緣とう拾ふ
へうきば
今日をゝゝをのゝうんとゝ思ひとけぬいそきさん
出来て海さしゝゝまゝ人ゝさりあるとく
毎ゝかぬ人ゝいゝゝうゝ毎のゝうゝ方ゝとゝそうし
て思ひうゝゝなゝりうゝゝをゝうゝひぬゝうゝゝう
ゝとつゝ事をゝとゝゝて後ゝうゝ人ゝさゝとゝそ

いとんゝゝ日ゝふゝ紛ゝゝ毎ゝまゝて思ひつゝ
ふゝ似ゝ一年ゝ思ゝうゝちゝもゝゝゝゝゝ一生乃
ゝもゝゝゝゝゝ

せうふうとさたりこしとうろのうたはなれよ
しと思ひさこめくくそそういのうくめと
いやしくくもとそちちうまきのたはなうた
はかとこしらうくしてあう佛とまとり
いあうくゆんそとんもさりふそとあうえ
ぬんきして家はうちあうこうひたさあ
うふはいとはたしうをといくこそうはた
さかいしうんとしうんとしうはなりて後尾よ
りて年わうふあうとさ海うたはまく
はまいしうあうはなうとともはうまそいうん

ふいとんはれうくあうたうんはなんもと
あうをふそうくめうあうはうとうひとと
海んそ年月へてうもあえぬあうむとも
うくめあうらさ海ふさくとありあうとせんさ
うくしかりあんしとうはいとはそ弟
衣よくくはのうあうはなみうはみそう
はものさうくうわ父あうもうはみそう
てうけきうふいとうはうさあうたそう湯に
てうもあるとあんよふいうらうふ花やうれう
はうそくいとうしんの弟さもよはの

[illegible]
くくゆのうの野辺あるふんぬ〜匂ひも相
のもうるてひとさしたくさくさ〜く
とあるとおとあれ乗うちあくびいまふ人の
幾うけるるさ海〜ふいとう〜わうこと
ちんとめく見彩人を何とうぬあるま
ととふうちとけぬ人さおとうて者て
きあくこれはくろい海り〜幾うれか
とこの日をまくゆとるり〜如も乗てう
かうりとわつて境えくうあるたて

くろひくゆうそれう〜あま
弁佛うを人のまあてぬ日乗ようり
そうよ
うう幾人れ人をうりてを智慧〜まり
と思う毎はうふはうるうれてるこ人
れ言うけすうりうさうみあう
さう〜これ人のけ前芸りとうなる幾の
てとのまう智ふ及ばれとうのくよ海の
道れくこと変をと人のまうれみくとあま
とうれるとと思うん事〜大あうあやまりか

五人一文字は法師陀羅尼の禅師なり
ふたりてをのまふすと思へるとも
すてあるこゝろをのまふ院宮よりはふるあと
いはるゝ人ゝすは思ひ能ふ人ゝ
五人の人と見る眼をとゝとゝもあや海の形を
へゝ法をのまふ人を或人のふそゝを我思い
ゝて人とゝる事あんするなり
滅と思ひてはまふふらゝ人ゝはりはまり
ふゝ伝をおこして形まゝりて廣云
とゝはゝる人はりゝ行ゝを思ゝて人を

法をぬ人はりゝいゝゝはりるゝはりて
ものしりをあゝをとゝものまゝをはゝて
楽しゝゝる人はるとまゝ海とゝゝくはる
え孫ゝを人のふのりをさをはゝん也
て屋ゝはる人をはるゝゝ飛ゝ
はゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝみてはるまゝとはやゝゝゝぬ人
はりゝ飛ゝはゝゝはれはふりゝ思
はゝゝ形はやまゝゝもゝゝあゝとはやゝ
む人はるゝゝゝゝ屋ゝゝゝゝはりゝゝ

をうくとらふ人ありてこれをきき
てとどまりたるつゝみをとりすて
てやうやくをうこの人あり
てこれをうけとりてうちかへし
ゆくゝをこうしてあさしたる人出し
あるを人とたるゝ人ふなりてちをなん
ふひとあり悪者共中にたゝみまをり
きりうの人のおみくハけをあくのえうを
泪ゝをうかみくをとりあるをきをぬ
ゝまゝくあをうるん人共海をうる

をうくとらんとあるふるを共物共見
んうとゝ仏やうの共をうりうり
く仏法まくとるをらん人まをは
あるを
或人久我縄手を小独り
大口をうる人水ぬうり地蔵を田の中に
あるをうをうをうて物をうをうり
ひをりんをくみるふ待夜の男
二三人をくをまをりまをりくとく
ゝ人をゝゝていをりを久我国を食り

てそれらをくらべたるに
なを所々を作ぬりかんとるたひとそ
をはしけるを
東大寺の神輿東寺の家より西京乃
河原民の乙つとをもくらべけ度方得みく
そ紀式をもくらべ紀式に門相國社彫みく
鎧鐸いくはくとかくしたるを法
為の振舞を無双の家をもくらべひとい
らくこと人をくらべ法みをもくらべるを
山相國小山物をくらべあるを式法をもくら

をさるを春屋式無器無神とたそ法
小神社みくをよさ紀式をもくさをもくら
あるをもくらべるを
法寺の法のをみをあ次定彫の女彌也
ふる延喜式をくらべすへて数ける
をもくらべ人の通号みそ
楊名ふくらをもくらべ楊名間とをるをもくら
改り要器りくらべ
横川の行宣法師をくらべ
の四七律式をもくらべ和國を単律の四に

て呂氏春秋とかき
長行を業ひろめられ
海内をさいの年仁義の名ふかくて極ら
きてろハ長行なりけり
延元下総の年都落ハ内
なろハ延元ゆ
十月と称奇月とひくく称事ふくろ
（さのしいるとも地獄とも又也
又ハ仏道法花経を信ぜ
わるろ此月ろ仏の称ろ右神宮へ行

ぬまり行なといふ説あまたとも中説
しハ行ろのろハ伊勢ハらろ奈月と
ろハふろ仏ろ十月清社の行事
ろ例ろ紀ろ不吉の例也
勅動の所ろ勅ろ紀法今ろ考えて
ろ分ろ上代ハ世の中ハさハ
ろさ河ろ又条の天神ゆさ成ろ
鹿島ふゆさの北神とろ勅ろまて
ろろ神也有名の長の頁ろゆさとろ家
ろ明られぬまて人おろどハ中毎

えくのち今代世りい封をたろとりな
つふくり和人と志ろ時を持宝
ふ世くゆひつらふなり持宝代拾もん
ふ化法をいまへ三まふ人分とて
比叡山り大師勅諚の起結とろりい意
伝西書ろ給ふりすり起請みとり事
法曹のいこちさこすりいふ歴代ろへて
起請文ふたきくとこふろふたと近
代りり法者しうやえ法令みい水ろ
撫とくくと入ありいありれろへて

法太寺右大臣検地逸彼の別当の時中
門りて使庭の評定とふろれふかとり
安人章色ろ牛ろるまく庭代ろ化へく
大理の屋代ろ庭ゆ代へ一のりてろれ
うりろて郷名わふ名わたりさ性昊ふとと
て牛と法陽師のりへ人たろへきす
名ヤふ家定の相国中ふ法ふふふす
迎あまとしゆくつふのりうん魁鶏代宦
人立庭く御仕の微牛とろへ安屋ろ
ろ一ふく牛とハ立ろへ人へて上ふ

[illegible]
[illegible]
[illegible]

海とうかぶうりとしをあるよう
らぬるやさうるをたるさうふを
見ひてやそうんみ流りさうぬ人をな
ちるうんうらうふひうをもんハ
たちかくやうえをまし人をいまうさう及
ぬをたわうしをあるふまふたくを其
人のすれ流りしきるをとうりひ風り
あしをたるうるをれひうふりをやて
をいまやうそん流きるけを世りうり
ぬるうをたをのうるをうきりたわうを

あしをたるうるをうぬやうりたを風り
ぬるんたりうるをうきりのうふやうをるを
きぬ人のあるうを
をあるる家ふいをうるるる人れまふ入うる
ぬるしあるるしあるれ面りをを道行人
うをわうりあるう入孤ぬくうを風うれあを
人をふをうれ祢を面えうりあるをを
うをまるをうるをしうぬうを色ひうを
るるあるるみ焼りいを後軽をれ放りよ
海行れ新芽つうくううみふを後うをあ

らまつ　ふうとうさまと　庚申ようあれと
いろ　我　ふんぐのり　さまふ　ふ　ものと
うふ　ものと　いのり　なたまや　なるんくよ
ぬ　なるまつ　ものを　胸　うちりうこ
ろくれとも入　ろさ　ふ
毋　ふ　ものと　たれとうして
ろくろ　ふ　ものふ　とや　ふ
ものまい　れの　ふ屋　海上人　ものあまさそ
ものくい　さの人　生　たりとり　いりちいあさ
せんとろくろ　りていさ　ものりり　者とう

こて　れ　ろ　ろ　ろ　伝　おう　ろ　ろ　ろ

卿のそくしき屏風に宮このひるこ
ふ行ゑんちと素くやといそれけまこと
きりのふしぬけるかさきりと色とものけ
宮仕奇特りしとやとくさしりて
をんなとしてつふけまこと上人の感涙いと
つくりかりふりて
やふいとこふとゆりのそくめくさ風ふとこさ風
地りをんこりや巻物のといくさ風
ふとくまれたるひより紙をつる色
してゆひつくりもめくさ風り

そくとをくしとつ文と法筋をくまくさ
うありて阿弥陀仏法筋をれとも法筋
おさしぬや行ゑくえき見ると行とふ
て求ふるわと行くふれの巻そこく
のかとふ行ゑと申あわしそあるま
しとくりてまつせのひさそとの
とを見とくる部みのるまとしれ
人をいそうれとをいくく自筋
うや後白河院の法ふり独とたりと
一首のうちふわしるとんやと宮仕源

小野小町

秋の夜の月の光を見るにつけ
わがくまなくも物とうるらんと
なげきしかども
あはれとやさしかりしものを
あはれてかの
月をみるにつけてもこの
夏の月の
夢を見院のつきの
物の
物を

数行の成不審数を四方や繪図
あらいくさくうらはるやあきく
ものゆうるるり

へあまくなるひくく三塔勝礼のうの行
しうり摂川名所堂式うち武花
隠とうもうるさ彩あるを作理行成式行
ちくうひありくいまと変せとと中
修うちと堂僧とくくや行をと
行成からくうくうれあへ作理をた
裏書をへうは行とっひるくしにうハ

ちとはうり武の菓みくいをけるる成よ
くうれのしひてを名み行ーり行成
位墨名字年号ふんえ行ーう
ちへうれ異りへ
那蘭池寺みくく通眼屋読経をーり
八栄とうのをうまくれるとと
ひーーと不絶うれたほえうるーり
つりのちうわこう通くうやといひ
るれていくくく感ーりこと
貫物僧ぬよなうひくかれ名水とん行

り海をとをくぬけてり陣に
ゆりしりり陣はかの近衛部尺えん
法師とも成ぬしてをのこはかり
あるしこの海のうちに所おほくえをの
あるをとしひていとくへしくいでしに
とあるをしひしをれをこのくたをせよ
といをかりりうへくをくをくを
てをそぬ
二月十五日あっさあらしあくるをの
りまをてをうをちりへくひとりふか

くのくして藤中納言殿ゆりしふ後の
世遠ふりひへりとをのうふへくをさ
りあるまをあるひををもうれあり
をれををんあると思ひくすりのををる
り移あるをて花をこの海をれをあり
ぬをを後あるはたあをこの海のををあそく
法をといをかりつあるてふ年りある
年人へりあををりとみおとををふ
とをんあるをしはるをとと恨ををへん
ひるとをあひあしりをりををりをそ

[illegible]
[illegible]
人の法師にしりてきゝてはるかに
[illegible]
[illegible]
[illegible]

うせし事ども云ふにたりぬべし。せん年月のつもり
をもとりて、愚山ものともあひ、
りうんうはれをぬ云のそふてもはるめ
をそてそのんれうりまれひあんこ
ていつたなたるれ、りうへ、うた
世なるんりつをくもおうくるり見り
くを年をあけるんに男をあるあ、さ
あれあめりはうをあるをいつりる
うん風いとんをんたりせうを迷うあは
ひうひるうんも新をりくなはるん

いとうはいるうう笑梅の花うう
き来れたるる月りうみ見うた
ううれ雪ふうそん生明の色もわの
方はりしのうるうくもるうん
人をううあこれまはるんりはう
うう
望月れ海とうるる事をううも位を
もやうくをぬんうめぬんを一来れ中は
を海てううるを海も見えぬやあるん病
れたりうも位をふひまるして死を

てうをしたまつりしに病急なり
を死すれども心ばかりは常住平生
の心なり習ひなく生のゆめからうつつ
となりて後ふかく道成佛をねがふ
ばかりなり病とうきく死つりなむ時
不動一尊を成せたまひてとりけ
の御急と仰くべしとなり立ち成つる
命をまもりたませて成佛日りつきくけり
はるのおこりをとりてをんとなりひ仏を
こをりめとやくれたりぬまは我みも

あるをとりみてていくぬけくひみを
くはるめうまのまりいそをんをと
をして不動と成して後明王あるを
りしをんとせて不動つへをと如
幻の生れ中りは行りをふをんをん
て不動菩薩想なり不動んりをら
菩心速成と云をくを一をとをへを
を西てり第をりを放下してをり
ひをの時をりをくをんりをりて不動をして四動を
くをりをり

世こうをへて遠順てつくるゆい
ゑをへて苦楽のあるより楽とふさこ
のこゝろをもつてせこまと求ふとやし
ゆゑ楽欲すう不一りいたるり名な
二種あると行法と戒とのうまれやこ
ゆゑ多欲こふゆゑ味りを物ゆの物ひゆ
こふゆゑ顛倒の相ありとこ
ろをこゝろこゝろいたりあこう
人のいこう
ふゆゑ一生父母くつくる仏を

ゆゑ物ゆゑひらんとふちくる仏りを
人の成るゆとふゆゑ行をして仏よ
ゆゑらんと父母仏ゆとふゆゑ
てゆゑなりとこうこゝろ向ゆゑけふかとけ
とを行ふゆゑ行ふまはとふこゝろをもこゝろ
ゆゑ仏りをふりて成ゆゆゆと
ふこゝろをもこゝろめいるゆゑ一の仏を
ゆゑ仏ゆゑけふとふ何ゆゑ成りゆ
ゆゑんとなりやこゝろをんとひくこゝろふ
ゆゑはこゝろをこゝろこゝろすゆゆ行ふと

徳義をもつて興さんと考